

第8回 子どもの心を知って保育を創るⅢ(2歳児) ～ 自我の芽生えを豊かに・世界を体で知る ～



講師 岡村 由紀子 氏

はじめに

子どもの心は見えにくいものです。ですから、子どもの心がわからないまま保育をすると、何となく保育が大人の視点になってしまいます。そこで、こうやって学び続けることや、園内で仲間と語り合っていくことが大切です。それがベースになって、保育が高まっていきます。

2歳児と言うと、まさに“乳児の中の乳児期”であり、この学年がなかなか大変な時期です。

1 体の発達

① 動き回ることについて

2歳児の世界を一言で言うと、「世界を体で知る」です。つまり、動き回って、じっとしてられない時期です。ですから、じっとして体動かしていない2歳児がいたら、その子に心を配ってあげたいと思います。体を動かす楽しさを子どもに伝えていきましょう。

2歳の頃、脳は大人の4/5、視力が0.5くらいの発育です。ぴよんぴよんと両足跳びができるようになり、腕を使ってぶら下がったり、滑り台の斜面も登ったりと、園の遊具のほとんどで遊ぶことができるようになります。体の各機能が発達していくには、体をつくっていくことがまず土台となります。

イメージを体で表現することができるようになるので、例えば、先生の真似をしてオオカミになって遊ぶこともできます。しかし、言葉によるコントロールはまだ無理なので、「止まって」と言っても子どもは止まりません。2歳児の場合は、

言葉で行動を変革することはできないのです。

② 手先の発達

手先が器用になり、ボタンをはめることや着替えができるようになったり、自分なりの思いやイメージを描画したりすることもできるようになります。なぐり書きができるのも、手首が自由に動くようになるからです。

2 心の発達

① 自我

自分はやりたいけど、その力がなくてできないことの多い、“ややこしい”時期です。できないからといって大人が手伝うと怒ります。ですから、手伝っていることを感じさせないようにそっと手伝い、本人が自分でやれたと思わせてあげます。子どもの意欲を育てるという視点が大切です。

「こうしたい」という気持ちが強くなるので、友達とぶつかることが多くなります。喧嘩は自我と自我のぶつかり合い。この時に大事なことは、このトラブルを他者理解のチャンスにすることです。「私も使いたいけど、ここにも使いたい子がいる」ことがわかることです。

順番を守るためには、見通しを持てる必要があります。見通しがないと我慢はできません。ただし、我慢する先に苦しいことがあるのでは、“我慢”は難しいので、見通しの先に楽しいことがあるといいです。「これをしないとできないよ」という否定型よりも、「これをしたらこれができるね」というプラスのとらえがいいです。大人の支えの質が問われます。

2歳児クラスでは、遊びから次への切り替えが難しくなります。例えば、お散歩先から帰りたいがらない子どもたちに、「お昼ご飯が待っているよ」と伝えてもなかなか動きません。しかし、例えば、「次はガーガーを見に行こうか」と誘い、子どもたちの大好きな乗り物を探しながら歩いていくといつのまにか園に帰ることができるのです。子どもたちの願いや思いを汲んで、今“ブーム”になっていることをうまく使いながら次の行動へ切り替えていきます。2歳児の指導は、“ノリ”の世界（ごっこの世界）で切り替えていくことがいいと思います。だだこねを放っておくと、ただのわがままになります。放っておくのではなく、我慢できない子どもに付き合い、その子が葛藤を越えて立ち直ることができるように支えていきましょう。

自我が発達してくると「見てて」という言葉が生まれます。「見てて」と言われることは、その子に選ばれているということです。「見てて」には2つの意味があります。1つは「自分がやるから手伝わないで」という意味。もう1つは「遠くに行かないでそこで見てて」という意味です。大人の支えがあって、子どもが自我を確立する時代です。

② 社会性

社会性が発達してきますので、人と物にこだわります。愛着を持つから、「いや」「だめ」が出てきます。

2歳児が順番を守らないで割り込んできたときの対応は、「自我の育ち」と「人と物へのこだわり」がキーワードです。割り込んでくるのは、順番を守りたくないわけではなく、その前後に気に入っている子や関心のある子がいるということです。そんな時には、まず、その子が入った場所の両脇の子に「いい？」と尋ねます。すると、その子たちは「嫌」と答えるでしょう。それを聞

いて怒ってパンチやキックをしたら、保育者が体を入れて止めましょう。「だめだって、残念だね」と共感してあげますが、それだけでは立ち直れないものです。そこで、「先生のおひぎで本を見ようか」と、その子が立ち直っていくところに支援をします。そして、その子が泣き止んだら、「我慢できたね」という一言が言えること。それが、プロの保育者です。子どもの行動に言葉を添えてあげましょう。子どもは、少しずつ真似して、学んで、発達していきます。

③ 自尊心

自我の育ちの中で、葛藤を味わいながらも子どもは“自尊心”を育てていきます。それは、何があっても守りたい“自分”です。

ある時、2歳児クラスで、お箸を使って食べられる子がその日に限って手で食べていました。先生に言われても、聞きません。「それじゃあ食べられないわよ」と先生に言われ、その拍子に食べている給食が落ちました。「ほら落ちたでしょ、拾いなさい」と言われても拾いません。先生が怒ります。先生が手伝ってあげようとしたら、ついに泣いて給食をひっくり返しました。食べたくない理由をわかってくれない先生も、給食も、拒否したのです。そうまでして自分の心を大事にしたい…これが自尊心。“誰にも譲れない自分”です。人間のすばらしさは、この自尊心によって自分自身を育てていく内面が育つこと。オンリーワンの自分（自己肯定感）につながるのです。

こういう力が育つ時は、先生も大変ですが1番大変なのは子ども自身です。こんなに泣いたり怒ったりしないと、自分に折り合いがつけられないわけです。怒りを抑えられるのは本人だけです。保育者は、その子を抱っこして、「わかるよ」と伝えてあげましょう。自分で自分の気持ちをコントロールする力を育てていきましょう。

3 言葉の発達・・・対の世界の獲得

① 認知の発達

「大きい・小さい」「全体・部分」のように比べる言葉が出てきます。小さい自分ではなく、大きい自分になりたい心があることがベースになります。それが発達してくるから、ややこしくなるのです。自分をコントロールするために、指すいをして自分を抑えたり、ひどいとチックが出てきたり、こだわったり、しつこい爪かみがあったりします。やりたいけどできない心が揺れ動きまわります。ここを支えるのが保育者で、行為に対して何かをいうよりも、子どもの葛藤やがまんしようという気持ちを支えていきましょう。

② 身振り・手振りもいれて

子どもの発する言語だけで子どもを理解することは難しいです。身振りや手振り、表情も含めて子どもの言語だと解釈した方が、子ども理解は深まります。2歳児だとかなりお話ができます。それは、子どもの中に記憶が育ってきているからです。また、質問が増えます。質問をしてそれに答えてもらうというやりとりが楽しいのです。質問に正しく答えてほしいというよりも、私が言ったら、この人はちゃんと応えてくれるというやりとりを楽しんでいます。それが人への信頼につながります。

また、象徴機能や記憶力が発達することで、ごっこあそびが豊かになります。例えば、1歳児は、「おにぎり」とだけで表現していたものが、2歳児では「これはシャケが入っています」「おかずはコロッケです」というように見立てる言葉が豊かになります。生活の記憶力が高くなっているからです。ですから、保育者は「おいしいですね」だけではなく「甘いですね」「次はみかんジュースをお願いします」のようにやりとりができるといいです。このやりとりが楽しくてごっこが広がるし、人間関係も豊かになります。(だから、ま

たトラブルも起きてくるわけで、非常にややこしいのですが・・・)

この時期に大切なことは、まず、共感することです。評価の言葉は避けましょう。「おにぎりですか、サンドイッチですか」と言葉が広がっていくように、会話を充実させていくといいです。

4 生活 ～基本的生活習慣の自立の芽生えを励まし援助する～

生活の基本的な部分が、この時代に育ちます。全てに共通するのは、個人差が大きいということです。自立心が育つ時でもあり、頼もしい存在と言えます。時間がかかっても、意欲を失わせないことが大事です。それには、あこがれる関係づくりが必要です。例えば、友達がおしっこするのを見て、自分もまねしようとする、といったことです。この時、比較して子どもをほめては、子どもをダメにするとよく言われます。「ほら、〇〇ちゃんを見てごらん。あなた、できないの？」…ではありません。

静岡大学附属幼稚園の藤野先生は、「百人いたら百人に向ける言葉を持ちましょう」と言われました。その子の心に合う言葉をかけることが私たちの仕事です。比べてはいけないのです。子どもが大きくなっているのは比較のなかではなく、その子自身の力なのだということがわかるように焦点化する言葉をかけていきましょう。

園は、「ああいうふうになりたい」というあこがれがいっぱいあるところでありたいものです。今の時代、生活の自立については、家庭よりも豊かにできる環境が、園なのではないでしょうか。全ての子どもたちに、集団の中での子どもの育ち、子育てのサポートがあるといいと思っています。

5 保育

① 保育の中で育てるもの

先生が「みんな集まって！」と言っても子どもは「なんで集まらなきゃいけないの？」と思っていることがあります。集まりたくなる指導を、まず考えなければいけません。小学校の授業形態とは異なるはずですが。この時期は、経験しなければ認知しないという感性感覚期です。経験を通して認知するという時期なのです。「一緒にやりたいね、一緒だと楽しいね」というように、自分の方から他者に関心をもつ、それが保育の中心です。「集まって」と言われたときに、「みんなでやるなら楽しいから集まろう」という気持ちになって集まるようにしたいものです。言葉で子どもを動かすのではなく、「楽しい」と心が動けば、子どもは必ず集まってきます。「一緒に楽しい」という、生活と遊びの経験が大事です。

要求を思うように表現してもいいんだ、という経験を積みませましょう。子どもの思いをかなえるという意味ではなく、子どもの思いに共感することです。子どもの自己表出を全部抑えてしまったら、自己肯定感の形成はできません。乳幼児期、子どもは不適切な表現をしながら大きくなっていくものです。この大人が言うことをやると楽しいんだなとわかれば、子どもは先生を信頼して先生が言うことをやろうという思いを持ちやすくなるのです。

自分で「できる力」を自信にする経験を積みませましょう。全身運動、手先の運動などが向上する時代で、生活や遊びの場面で「見て見て」が大好きです。「できる力」を喜んでいるのです。

体・手先が発達してくるので、それを十分に使いましょう。「お手伝い」は、大人へのあこがれです。大人が期待していることをできるようになりたい、大きくなりたい、という子どもの心なのです。やりたいというその子の気持ちを大事にします。また、言語の量が増える時期ですから、豊かな会話が成立するような、絵本やごっこ遊びな

どのやりとりを楽しみ、言葉をイメージしていきます。

保育の1番のベースは“人が大好き”という気持ちです。「友達っていいな、一緒だともっと楽しいな」という遊びの質の変化を感じさせたいものです。

6 指導

指導は、全てが子どもに共感することから始まります。ややこしい時代（拡大する自我の時代）であることを理解し、丁寧にその子の思いに共感しましょう。そのうえで、「やりたいよねえ、でもね…」と、その子の世界に戻していくという対応が必要です。

子どもは、自分に否定的な言葉を向けられたときの悲しみや怒りがわかるので、行動が「いけないこと」「困らせること」になりやすいです。この時も「まずは共感」という原則で対応します。当事者だけではなく周りの子どもにとってもその子を問題視せず、仲間として「ありのままでもいい」という感性的土台を創っていきましょう。

遊びが、物や大人との情動交流から「見立て・つもり」遊びに変化していきます。子どもが楽しく「見立て・つもり」を広げられるような遊びの指導が必要です。子ども自身が会話を増やし、「見立て・つもり」を豊かにすることができるよう、環境やモデルを創りましょう。

仲立ちになって会話しながら一緒に行動することで、子どもの遊びを支えましょう。「あのね」をゆっくりと聞き、子どもが話すことを大事にします。この丹念なやりとりが、子どもの探究心や安定した感情体験の土台になっていくのです。

第8回 保育者資質向上研修会
平成28年11月30日
会場：焼津公民館 大集会室